

高橋和巳の知識人論 —「わが解体」まで—

渡辺恭彦 †

はじめに

1966年、高橋和巳は「朝日ジャーナル」に2年間連載した『邪宗門』を刊行し、小説家としての仕事に一区切りをつけた。翌67年6月、高橋は中国文学の師である吉川幸次郎の後継者として京都大学文学部に着任する。これは、創作に重きを置いた生活から学問に専念する覚悟を決めたことを意味する。この決断に至るまでのいきさつを書き記した「楽園喪失」(1967)からは、H氏〔埴谷雄高〕の言葉が最終的に高橋の背中を押したことが分かる。もっとも、高橋の京都行きは、必ずしも周囲の人々すべてに受け入れられたわけではなかった。文学の同人はそれに反対し、和子夫人は自身も京都に戻ることを拒否してフランスへ留学している。周りとはとにかく、書生のような生活を送ったと述べているように、学問しなすことを高橋が自ら選んだことは間違いないところであろう。この決断は、結果的に高橋の行く末を大きく変える分岐点となった。

学問への専心を決めた高橋の意に反して、京都大学は喧騒につつまれる。1969年1月、京大闘争が本格化する⁽¹⁾。1月31日、高橋は京大文学部第一講義室でおこなわれた学部長および教官と学友会との団交に臨み、席上で全共闘支持の所信表明を行った。その結果、高橋は教授会で孤立。さらに、教員としての教育・研究に従事しながら、

寸暇を惜しんで学生運動家との対話や団交に応じる生活は、高橋の身体を蝕んでいった。高橋自身、運動に関わったことによる過労が病の原因であることを自覚しつつも、癌に侵されていることは長く知らされずにいた。

京大闘争に関わった体験を総括したルポルタージュが、1969年6月から10月に発表された「わが解体」である。高橋の作品は、実体験を仮構したものや題材を調べ上げて書かれたものが多い。硬質な文体が特徴であるその作品群のなかで、「わが解体」は高橋自身が直に体験した一連の出来事が率直な筆致でつづられており、稀有なテキストとなっている。高橋の気負いが投影されているとはいえ、高橋の学問や創作、現実との関わりが昇華されて生み出されたものといえよう。

高橋が批判を突きつけたのは、学問的にも敬意を払う教授陣であり、中には直接教えを受けた人物もいた。高橋が造反したのは、京大闘争への教授会の対応を見て、積み重ねてきた学問的研鑽がそこに生かされていないと感じたからであった。「わが解体」発表後、1970年3月に高橋は京都大学を辞職する。その後、闘病生活のかたわら、季刊同人雑誌「人間として」を小田実・開高健・柴田翔・真継伸彦らと創刊したほか全共闘運動をめぐる対談や講演をこなしたが、1971年5月3日に39歳の若さで永眠する。まとまった文章としては、『わ

† 京都大学大学文書館助教

が解体』(1971)に収録される「わが解体」、「三度目の敗北—闘病の記」、「内ゲバの論理はこえられるか」等が事実上の絶筆となった。

本論は「わが解体」から遡って高橋の知識人論および学問論をたどり、京大闘争へのコミットを経て高橋の考えが尖鋭化されていったことを示す。

一、『悲の器』(1962)と「知識人の苦悩—漱石の『それから』について—」(1967)

高橋は京大闘争に関わる前から、実作や学術論文で現代に生きる知識人の問題を扱ってきた。自身の大学院生時代からモチーフを取ったという『悲の器』(1962)では、作中で〈学問と研究の崇高性はどこにあるか〉というテーゼを掲げ、知識人の運命を描いた。

また高橋は、フランス文学者の桑原武夫を班長とする京都大学人文科学研究所の文学理論研究会に参加している。同研究会は、「文学とはどういうものか」を理論的に研究することを目的に組織され、日本における文学が対象とされた。1960年5月13日に第一回の研究会が行われ、66年まで計139回の研究会が開催された⁽²⁾。1960年は、高橋が立命館大学に職を得て、現代中国語と文学概論を担当した年であり、研究者として出発した時期でもあった。研究会で高橋は、中国文学理論の紹介や想像力理論の構築を担当した。同研究会は、高橋のその後の言動に照らしてみると、社会運動と文学研究、ひいては政治と文学という問題を考えるうえで、学術的な次元にとどまらない影響を高橋に及ぼしている。たとえば、1969年の京大闘争時に、教養部の教員であった作田啓一(社会学)と山田稔(フランス文学)は、教養部代議員大会をめぐって内ゲバが起こったことを自分たちの責任として受け止め、ハンガー・ストライキーに臨んだ。高橋は二人のハンスト開始を伝え聞き、深夜に見舞いに訪れたことを「わが解体」で触れている。これは高橋が二人と文学理論研究会を共に

した誼があったためであり、闘争に積極的に関わっていたという点で、三人は共鳴するところがあったと思われる。

1960年6月15日、日米安保法案の採決をめぐって国会議事堂前でデモ隊と機動隊が衝突し、全学連の活動家で東京大学の学生であった樺美智子が犠牲となった。犠牲の知らせが京都に届いたとき、高橋は永井荷風の研究会に参加していた。研究会の指導者は、研究会を中止し東京へ駆けつけるべきことを主張したが、高橋はそれぞれの持ち場を守るべきだとして研究会続行を主張した。安保闘争に関心がなかったわけではない。その晩京都でデモに参加し、10年後には樺を追悼する文章「死者の視野にあるもの」を寄せていることから、高橋は犠牲を重く捉えていたことが窺える⁽³⁾。高橋が参加していた永井荷風の研究会とは、先に挙げた文学理論の研究会であると推測される。研究会の対象は日本文学であり、実際に西川長夫「日本におけるフランス—マチネ・ポエティック論」が永井荷風を扱っているからである。当時の高橋にとって、文学の理論的研究に専心することが、もっとも優先されていたといえよう。

研究会における高橋の研究成果が「知識人の苦悩—漱石の『それから』について—」(1967)である⁽⁴⁾。高橋は漱石をはじめとする作家を取り上げ、日本が近代化の過程で生んだ知識人の型として位置付けた。同論文では、日本文学の分野において、知性的作家によって教養人が描かれた後、昭和初年の左翼文学の勃興によって政治的なインテリゲンチヤ型の人物が描かれたものの、国民の精神的共有財産となるには至らなかったとみなしている。知識人文学の系譜にあり、別のタイプの知識人を生む可能性がある小説として、高橋は未完段階の野間宏『青年の環』⁽⁵⁾を挙げる。さらに、「専門的知識のあり方やその苦渋について」正面きって問題にしはじめた小説として挙げるのが、自身の作品『悲の器』(1962)である⁽⁶⁾。以下、『悲の器』

の一部を要約する。

同作は、現象学的法理論を提唱する法学徒 正木典膳（55歳）をめぐる小説である。正木はアカデミックな世界での上昇をひたすら目指したすえに学界の権威となった人物として描かれている。

作品は全編が正木の一人称形式で物語られ、序盤では徒弟修業時代である二十代から三十代までの青壮年期が回顧される。法学研究室内部での人間模様は、高橋自身の大学院生時代がモチーフとなっているという。正木の恩師である宮地経世博士の門下には、法社会学者である荻野助教授、宮地の学説を忠実に祖述する富田副手、そして歴史主義法学を専門とする正木らが集っていた。宮地の研究室で刊行していた雑誌「国家」が国から弾圧を受け、編集実務を担っていた大学院生らが突然検挙される。同じ時期、宮地は三人の門下生に、宮地と学問的立場が異なり国家主義者である久米教授が同名の雑誌「国家」を発刊するという話を伝えた。これは、雑誌同士の対抗を示すものであった。宮地は三人に、これまで発表された論文を凌駕する論文を書くよう求め、自信をもって手を挙げた荻野に巻頭論文執筆の役を任せた。しかし荻野は、巻頭論文の筆禍で検挙され、学問の道を閉ざされることとなる。富田はもっともアカデミックな立場の法学研究者であったが、この前後に突然辞表を出し、不可解な失踪を遂げた。失踪前に富田が残した論文は、従来の論文体からは逸脱した文学的アフォリズムの集積というべきもので、雑誌「国家」への掲載は見送られたが、前人未達の領域を切り開こうとするものであった。富田は法の消滅を説くアナキストとなって、大学を離れて行った。

三人のうち二人が大学を去り、正木のみが法学研究を続けることとなった。正木はその後、助教授から検事に転身する。検事になってからも、三人のなかで自分だけが法学を生業としていることに正木は後ろめたさを感じ、また自説を貫いた荻

野への羨望を抱いている。正木はこう自問自答する。「身の置き所を変えないで学問をかえるか、学問をかえないで身の置き場所を変えるか、さらには、法律家であることをやめてしまうか。もちろん、私自身にとっても、あの時期こそが人生の岐路であり、遂に窮極においては弁解しえない、学者から検察官への転向への時期となった。」⁽⁷⁾

高橋が『悲の器』を執筆していたのは、立命館大学の教壇に立っていた時期である⁽⁸⁾。研究者と小説家という二足のわらじを履き、その折り合いをどのようにつけるかについて高橋が苦慮していたであろうことは想像に難くない。高橋は自分自身の考えを登場人物に語らせる手法を採っていた。作中で正木が学問への向き合い方について語っていることから、高橋の心情を察することができよう。

高橋にとって『悲の器』の主要テーマは「専門的知識のあり方やその苦渋について」⁽⁹⁾ というものであった。このテーマをよく表しているくだりがある。

警察官職務執行法改正法案が提出され、それに反対する学生のストライキやデモが日本各地で巻き起こっていた。正木はこの時法学部長を務めており、教授会では学生の処分が議題となっていた。学生大会でストを決議した責任者九名の停学処分が決定した夜に、正木の自宅を学内自治会副委員長が訪れた。正木は講義準備を中断して自治会の政治青年と会い、質問に答えた。その間、正木は自身の講義についてこう独白する。

学者は亀を追うアキレスのように、寸刻の休息もなく、走りつづけていなければならない。それが研究者の運命であり、教授者の誠実である。〈中略〉数時間かかって一つの判例を検討し、数日を費やして一つの課題を考えつづけ、そして何の結論、何の有用性をも導きだすことができなくとも、いまこの時間を無駄に見送るか、勇気をあらたにことを始めるかが常に学の分岐

点なのだ。⁽¹⁰⁾

あくまでも作中人物の言葉ではあるが、高橋は学者や研究者の規定として、「厳密性、客観性、合理性、体系性」の探求に身を捧げることを挙げている。『悲の器』が第一回河出書房新社「文芸賞」の長編部門に当選した後、高橋は1964年12月に立命館大学を辞し、専業作家となる。1965年には、1959年から同人雑誌『VIKING』で連載した『憂鬱なる党派』を刊行したのと並行して、最後の長編小説となる『邪宗門』の準備へと入った。その後1966年4月に明治大学文学部に勤務するまで、1年以上、小説に専念する生活を送ったことになる。

学問の規定を挙げた『悲の器』を執筆している時期、高橋は「逸脱の論理—埴谷雄高論」や「自立の精神—竹内好における鲁迅精神」といった論文を発表するなど、研究にも力を注いでいた。『悲の器』自体が大学内部を描いた小説であり、作中で学問とは何かが繰り返し問われている。また、論文調といっているほどの硬い文体である。こうした事柄を考えると、『悲の器』執筆期に高橋は、学問に比重を置いていたと思われる。『悲の器』が世に認められた後小説に専念したことは、学問から一時離れることを選んだといえよう。

二. 文学と学問

(1) 「解体」の兆し

『悲の器』と『憂鬱なる党派』を刊行した時期に、高橋は野間宏と文学に何ができるかをめぐって対談を行った（『現代文学の起点』『文芸』1966年4月号）。1965年2月に、高橋は「野間宏論」を発表しており、野間宏は『青年の環』を対談の数年後に完結させることになる。両者は対談で双方の作品を批評しつつ、鋭く意見を対立させた。高橋によれば、野間の小説は中心人物の歩みははっきりしているが、中心人物の関係する人間関係が読者の精神をふくらませることに乏しいという。作

品中で人間関係を峻烈に描くことに一つの文学精神があるというのが、高橋の立場である。

高橋は人間を矛盾した存在として捉える。これには、高橋自身が十代半ばに敗戦という価値転換を経験したため、自己形成において矛盾を持っているという自己分析が背景にある。高橋はドストエフスキーの『カラマゾフの兄弟』を例にとり、3人の兄弟に分離して描いた矛盾は、本来一人の人間の中に共存しているという。高橋の見方では、野間はその矛盾を単一化しようとしている。しかし、その矛盾を描き、読者に自己の矛盾を気づかせるところにこそ文学の意味があると高橋は考える。

一方で野間が高橋に期待したのは、「解体というものを徹底的にやる」ということであった。主人公正木の一人称で語られる『悲の器』は総合に向かっているが、複数の登場人物の視点に立って叙述される『憂鬱なる党派』は「解体」へと向かっていると野間は解釈する。野間は『悲の器』が受賞した文芸賞の選者になっており、他の選者福田恆存・埴谷雄高・寺田透・中村真一郎のなかで、もっとも厳しい批評をした。それは、同作が若くして総合を目指そうとしているからだという。実際、55歳の法学の権威を主人公に設定し一人称で語るという手法は、30歳前後の高橋にとっては、経験的なことからみでは書き得ない、想像力を必要とするものであっただろう。一方『憂鬱なる党派』は、高橋自身が50年代に体験した学生運動をもとに8年がかりで執筆された。野間は『憂鬱なる党派』を取り上げ、女学校の教員を辞して小説を刊行しようとする登場人物の西村が最後に故郷の釜ヶ崎に戻り破滅するという筋は、「解体」を志向していると捉える。野間是对談で高橋に厳しい言葉を向けながらも、「解体」に向かう『憂鬱なる党派』が『悲の器』を超えているとみる。

高橋が「解体」という表現を使っていることはほとんどないことを考えると、3年後に高橋が著した「わが解体」には、「大学解体」という標語

に加えて、野間との対談で出された「解体」という言葉が尾を引いているのではないか。野間と対談を行った翌月の1966年5月、高橋は『邪宗門』の連載を終える。

（2）「絶対性」の希求

『邪宗門』を完成させた後、高橋は1967年6月に京都大学文学部に着任する。この時期に高橋が文学や学問をどのように捉えていたのかがよく分かるのが、吉本隆明との対談「現代の文学と思想」（1968年5月）である。3時間半に及ぶ対談では、文学や学問の区分にはじまり、『邪宗門』、吉本の「大衆の原像」などが議論された。

さかのぼれば、高橋は修学時代の二十代半ばから文学と学問の区別について自覚的であった。1957年3月1日に高橋は小松実（左京）らと同人雑誌『対話』を発刊し、第二号に「文学の責任」を発表した。「文学の責任」は、世界文学や西洋哲学が縦横に参照され、膨大な読書をそのまま自分のものにしようとする気負いすら感じさせる。そのなかで高橋は、人が実現可能なことを選択するのは職業を選択決定するときであると述べた。そのうえで、学問をこう規定している。「極度に探究領域を細分し専門化していった学問は、この、人間をも商品化し、交換価値化しようとする支配階級にたいして、その専門性において、独立と不可交換性を獲得することができた。」⁽¹¹⁾つまり高橋によれば、学者は専門性を獲得することで、交換不可能な絶対性を得るに至るという。そしてここで、学問と対置されているのが文学である。「文学は、またちがった絶対性の獲得をめざし、そしてある程度成功した。その絶対性とは、低い段階においては異常な経験、もしそれ自体異常でない場合は、異常なまでの分析、そしてただただ分析のみ。そして磨きのかかった文体の援助によって、彼ならねばなしえぬ、個別的な存在者の不可交換性をきざきあげたのである。」⁽¹²⁾職業に就く以前の高橋が、

学問にせよ文学にせよ、「かけがえのない自己存在の絶対性」を希求していることがみてとれる。自己の絶対性を社会に示す方法として高橋は二つの方法を挙げた。すなわち、分業のなかにはいつて専門家となるか、あるいは自己の絶対性を押し出すという文学の孤独な営みがいずれ全体性の認識へと至ることに賭けるか。「文学の責任」（1957）からは、1957年の段階で高橋が文学と学問のいずれを選ぼうとしていたのかを確定することはできない。しかし、この両者を意識しつつ創作活動と中国文学研究を並行して進めていたことまではいえよう。

吉本との対談は、文学と学問を糸口に始まった。そこで吉本から高橋に向けられたのが、学術論文と批評文の区分がどこにあるかという問いである。吉本は詩や文芸批評を主たる領域として仕事をし、一方で高橋は文学、学問、批評を横断して仕事をしてきた。学問・創作・批評を両立させることが可能なかという問いは挑発的にも思われる。

高橋は吉本の問いに対して「時代精神の運動として創作・鑑賞・批評・研究が円環構造を成して、はじめて一つの意味を持つ」⁽¹³⁾と答えた。批評は作者から読者への一方的な流れを逆流させる操作であるのに対して、学問的な作業は自己抑制を必要とし対象に対して受け身に立つという性質があると高橋は捉えている。そして、高橋の学問観は、次の発言によくあらわれている。

学問には、詰って動かない流れを動かせるという発掘や解釈の作業、あるいは円環の流れを一定させるという客観的な価値判断の任務があるにせよ、広い意味では、学問もそういう逆流の操作を担当して、文学の土壌全体を豊かにする点では批評とそんなに差はないと思うのですけれども。ともあれそういう文学圏というものを考えたいということが一つ。／もう一つは、学問の場合ですと、即自的な自我を可能なかぎ

り抑制し、徹底的に受身に立って、いったんは自分の追究している研究対象に同化して、対象を鮮明に浮かび上がらせることのみに努力しなければならぬという性質があると思うのです。／批評の場合は、同じような意味で追究の操作をしながらも、自分自身を追究操作それ自体の中で自己開示していくという、非常にめでたい性質があって、同じ対象を学問的にも研究できるし、批評的にも取り上げられるんじゃないか⁽¹⁴⁾

高橋はいずれが優位という観点から創作・批評・学問を捉えているわけではなく、それぞれの方法をまとめ上げて時代精神を明らかにすることを目的としているといえる。上の発言にみられるように、学問と批評は同じ対象を扱うことができるというのが、高橋の立場である。高橋はカール・レーヴィットの『ヘーゲルからニーチェへ』をもとに、ヘーゲルが学生に対して語った言葉を引く。ラテン語やギリシャ語など自分とは違った言語を徹底して勉強することで、逆に自分の精神を発見できるというのがヘーゲルの教えであった。このように、自分を無にして異質なものに同化することが、逆に自己を発見することにつながるという。原文の意味を忠実に解釈するという作業は、主体性に乏しいようにも思える。しかし高橋は、自己を抑えて古典にのめりこむことで、転じて自分の考えが溢れ出てくるという。その場合に自己を表現する手段として選ばれるのが、高橋にあっては、小説と批評である。自分のなかにある矛盾を混沌としたまま出さなければ表現にならない場合に小説の形式を取り、矛盾をある程度整理できてもっとも言いたいことがわかっている場合に批評の形式をとるという。

吉本はさらに高橋に問いかける。偉大な学者とされる人物の文章を読んでも感銘を受けない場合があるが、文章から学問の質をはかるべきか、文学における文章と学問における文章は違うのか。

これに対して、高橋は中国の「学・才・気」という観念を持ち出し、こう答えた。

才、気が必ずしもなくても、重箱の底を突つくような、懸命な実証の積みたてがあれば、充分条件ではないまでも、学者としての必要条件は満たすと考えたいと思います。またその実証成果を発表する際の表現が文章として記号以上に出ないで、文学的な感銘を与えず、数字みただいになっていても、やはり根拠のない憶測や、外国の学説の剽窃を文章上の技巧でごまかしたものよりはよいという気がするのです。⁽¹⁵⁾

つまり高橋の見方では、学問においては文章上の技巧よりも細かな事実の探求が重んじられる。この考え方を支えているのが、高橋が専門とする中国文学の実証的な研究手法である。高橋によれば、中国的・儒家的には、王陽明のような例外を別とすれば、細かな事実を通じてしか大きな人間の真実というものはつかめないという信念があるという。その時代の人間の苦しみを描くことが文学や学問の使命であり、学問の表現が人の心を打たないものになっているとすれば、それは人間とは何かという自己省察が足りないからであると高橋は述べる。

高橋は文学の作品で世の中を変えることはできないと考えていた。文学は心の座標軸ともいうべきものであり、主人公に同化することによって自分の座標軸を動かすことができるという。高橋にとって文学とは、そこで描かれる人間関係のあり方を読み取り、人間はどうあるべきかを学ぶものであった⁽¹⁶⁾。

三. 知識人をめぐって

(1) 矛盾の体現者としての知識人

高橋は『悲の器』(1962)で知識人の苦悩を描いた後、1963年前後から下記の知識人論を発表し

ている。「中国知識人と日本」（1963年9月）、「失明の階層—中間階級論」（1963年10月）、「知識人と民衆—文化大革命小論—」（1967年11月）。ダントの『神曲』から「失明」の比喩を引いて始まる「失明の階層」は、指導者をもたない中間層が理念的な自己否定性を持っている点に期待を寄せている。中間層は、自身のエゴイズムや出世主義に自責の念を持ちつつも、経済的にも文化的にも向上したいと願っている。高橋が中間層にこだわっているのは、知識人が生活の面ではプロレタリアに近く、その苦渋について知っているためである。また、中間層が価値や目標を喪失していることに對して、思惟することを職務とする知識人は責任があると考えからである。ここで高橋は、自己の思想の体现者としてプロレタリアートを選んだマルクスに依拠している。知識人と中間層という対比を前面に出しているわけではないが、高橋が知識人の立場から中間層を分析していることが分かる。「知識人と民衆」は文化大革命をもとに中国の階級構造を辿った論考で、マルクス主義における知識人の役割を分析している。これらの論考からは、マルクス主義や中国近現代史に照らして知識人がいかにあるべきかを模索していることがみてとれる。

また、立命館大学で1962年前後に行われたと推定される講演会草稿「現代日本知識人の課題」では、自身が企業への就職活動で躓いた経験等にも触れながら、知識人予備軍としての大学生に知識人のあり方について語っている。高橋はマンハイムが提示した浮遊するインテリゲンチヤ論に依拠しつつ、知識人の性格として、資本・生産手段を持たず一片の知識・思考能力・良心のみ持つことを挙げる。後の論に照らすと、「インテリゲンチヤは、自分の出身階層を裏切ろうとする性質を理論的に持つ」とか「インテリゲンチヤはそれ自体、ひとつの矛盾体」であるといった表現は、その後展開される主張の萌芽になっていると思われる⁽¹⁷⁾。

1966、67年には、文学をテーマにした講演会で知識人に関する考えを率直に述べている⁽¹⁸⁾。1966年11月に早稲田大学で行われた「墮落の二重性」では、文学こそ人間を救済しようという考えで文学をはじめたものの、いざ全力投球で小説を書いてみると救済されるどころか自分をみずから追いつめるという絶望的な状況に陥ったと語った。文学とは高橋にとって自らを鞭打って想像する作業であり、自分の内部を深く掘ることである。高橋が知識人の問題にこだわるのは、社会の矛盾が知識人の心の中にあるからだという。心の中が問題であるため、労働者のように生活の形態では規定できない。知識人の規定について、高橋は次のように言い表している。

人間のさまざまな矛盾、それが社会的な形態をとれば大きな勢力争いになります、そういう争いの形態を非常に小さな小さな胚芽としてすべて持っていて、だからひとりぼっちでほっておかれても永遠に会話のできる人間、自分自身の内部で永遠に論争をしていることのできる人間、たぶんそういう人間のことを知識人というのではないかと思います。〈中略〉そういうかたちでものをみる見る眼を持ってしまったということで、この世の中を生きていくことはできないという存在が、要するに知識人ということだろうと思います。⁽¹⁹⁾

社会の矛盾を引き受け、ひとりで永遠に考えるという高橋の知識人観は、1967年の講演会「現代文学の課題」で、文学史や社会的な文脈に即して具体的に論じられる。高橋がそれまでに書いた小説のすべてに、現代に生きる知識人が登場する。『悲の器』が知識人の運命を追究し、『墮落』が満州国の建設に関わった右派インテリを扱い、『憂鬱なる党派』は高橋の体験をもとに学生運動家が挫折していく姿を描いた。これは必ずしも自覚的に

知識人を題材に取ったわけではなく、小説を書いたのちに高橋にとって知識人の問題が一義的であることが分かったという。

講演会で高橋は、自分自身を知識人の一員と規定した。自分を特権視しているわけではない。高橋によれば、身分制が崩壊した近代社会では、知識人は身分としては規定できない。知識を獲得し自立的な思弁によって自ら知識人になるしかない。知識人はその時代の尖鋭的な矛盾を体現する存在であり、みずからにかかってくる社会的な制約に対して、自分自身の理性的な思弁によって反抗し、生き方を選択する。そのようにしてしか自分自身を築くことができないという運命を近代の知識人は担わされている。高橋は「将来においては万人が知識人にならねばならない」⁽²⁰⁾ という。これは「現代日本知識人の課題」で埴谷雄高の説として引かれたものと同内容であるから、埴谷の知識人観から影響を強く受けていることが分かる。高橋は、人間のあるべき関係を読者に示したり、人間の矛盾に気づかせることを文学の課題とした。実作で知識人を扱ったのは、知識人としての苦悩や生き方を読者に迫体験させる、高橋なりの実践であったといえよう。

1968年3月、高橋は江藤淳・永井陽之助・いいだももとの対談「現代知識人の役割」に臨み、知識人についてまとめた考えを述べている。知識人が自立するには、国家からの承認ではなく、専門家同士の相互承認こそ必要であるという。この考えには、ソビエトの知識人と会った際に抱いた不満が背景にある。国家のイデオロギーを疑わない専門人になりきっている知識人からは人間の本質的な問題が出てこないと高橋は考えた。

対談では、日本の論壇で発言する場合、特定のグループの利害を付度することが求められるということが問題とされた。しかし高橋は、ソビエトの知識人と比べると、進歩勢力や保守勢力といった複数のグループが存在して価値が相対化されて

いる日本の方がよいという。この考えには、価値を国家だけに集約するのではなく、複数の価値が並存することを望む、高橋の価値論が根底にある。

また、マルクス主義における知識人の位置づけについても高橋は批判的な考えを持つに至っている。資本家と労働者という二大階級の抗争によって歴史が転換するというマルクス主義においては、知識人は階級的にはどちらにも属さない不労階層とされ、せいぜい同伴者か知的援助者にすぎない。自分を知識人と仮定するならば、門地も富もなく知識だけで切り抜けていく場合に、出身や家庭、近隣を裏切ってしまったといううしろめたさが内面の問題として入ってくると高橋はいう。つまり高橋にとっての知識人とは、国家やマルクス主義のイデオロギーによってではなく、内面によって規定される存在なのである。

(2) 吉本隆明の「大衆の原像」と高橋和己の「脱庶民」

1968年5月の吉本との対談では、知識人と大衆について議論が交わされた。この時期吉本は「大衆の原像」という自説を展開しており、旧来のものとは異なる知識人像を広めつつあった。まずは吉本が大衆をどのように捉えたのか見ておく。

1960年安保闘争時に大衆と行動をともにした吉本は、「擬制の終焉」(1960年9月)で「学生と大衆の自然成長的な大衆行動の渦」が既存の指導部(日本共産党)を乗り越えたと見なした⁽²¹⁾。その後「現状と展望」(1961年12月)では、生活者である大衆を前衛が文化者に引き上げるという啓蒙主義を批判した。むしろ前衛とは、自立した大衆がみずから選びとるものだという。そして、吉本を象徴する言葉となる「大衆の原像」が展開されたのが「状況とはなにかⅠ—知識人と大衆」(1966年2月)である。吉本は「大衆の原像」をこう定義する。

この大衆のあるがままの存在の原像は、わたしたちが多少でも知的な存在であろうとするとき思想が離陸してゆくべき最初の対象となる。⁽²²⁾

前衛の批判者として現れた1960年から1966年にかけて、吉本自身が知識人（前衛）の存在規定を理論化する方向に向かっていることが分かる。吉本の規定では、大衆とは生活の基盤からは離れようとしなないものである。一方知識人は、世界認識という観点ではもっとも高度な水準にまで到達するという必然的な自然過程をもつと同時に、社会の構成を生活の水準によって捉えるという基盤を喪失するという自然過程をもつという。大衆と知識人の存在規定をこのように区分したうえで、大衆から知識人への上昇過程は、生活基盤を喪失するかぎり、どんな有意義性ももたない自然過程であると吉本は捉える。知識人の政治的集団を有意義なものとするためには、「大衆の存在の原像を自らのなかに繰込む」⁽²³⁾ことが課題となる。つまり、知識人は大衆からはなれていくのではなく、絶えず「大衆の原像」を自己に繰り込むべきであると吉本は考えている。

吉本の「大衆の原像」に対して、高橋は68年の対談でこう批判を向けた。

吉本さんが、潔癖で、きびしく、いったん表現者としての位置を確立してしまったあとにも、ちゃんとものを言おうにも言えない人たちのことまで配慮していることは、態度としては非常にりっぱですけれども、政治用語で「大衆」といわれる人たちに手を差しのべることが、よくも悪しくも表現者として自分が確立してしまったあとでは、はたして最高度に誠実なのかどうか。⁽²⁴⁾

すなわち、吉本の「大衆の原像」に即せば表現者として自己を確立した後も大衆の代弁者となるべ

きだが、大衆のもとへと下降することにどこか欺瞞的なところはないかと高橋は問うている。吉本が大衆に寄り添うことを前面に押し出すのに対して、高橋は庶民から離脱していく存在として知識人を捉える。

庶民というと、おふくろの顔が浮かんだり、近所の人の顔が浮かぶのですが、そういう人たちは、ぼくが努力してインテリになっていく過程を喜んでこそくれ、だれもおこってないのですけれども、ぼく自身、脱家庭であり、脱近隣の徒であり、脱庶民の徒である。懸命に向上欲にすがって、空からおりてきた一本の糸に、自分だけつかまって、ほかの人を現実にはとばした記憶はないのですけれども、何となくみんなと一緒に行かないで、一人で這いのぼっていったという感じがどうしてもします。⁽²⁵⁾

高橋が家族や隣近所の人々を踏み台にしたかのような罪責感を抱いていることには、高橋の来歴が影響していると思われる。高橋が生まれ育ったのは、作中でも度々題材に取られる大阪釜ヶ崎周辺の地域である⁽²⁶⁾。『憂鬱なる党派』、『邪宗門』で作中の登場人物が絶命するのは、いずれも吸い寄せられるように戻った釜ヶ崎である。高橋にあっては、知識人として上昇していく過程で、離れていきつつも逃れられない場所として故郷がある。このように、吉本との対談では、生まれ育った故郷に罪責感を抱いていることが浮き彫りになった。

それ以前からも高橋は、知識人が民衆から委任を受けて知的作業に従事しているという考えを持っていた。直接生産者である国民が作った富に養われているため、知識人は委託を受けていることに責任感を持つべきであると高橋はいう。高橋が知的作業として行っている小説の構想力は、マルクス主義との関係からではなく、「自分の思弁活動に委任してくれた人の対応と距離」からくるもの

である。このような使命感を高橋は「刻苦勉勵の大上段主義」と表現している⁽²⁷⁾。

みずからを知識人として規定することは、傲慢のそしりを免れないだろう。しかしそのような「大上段主義」の裏には、人から委任を受けたことに責任を感じ、自らを痛めつけるほどに知的労働に打ち込むという意図があった。高橋の知識人論を辿ってみて分かるのは、マンハイムやマルクス主義の理論を参照しつつも、最終的にはみずからに鞭打って創作する文学へと回帰していることである。とはいえ、知識人を扱った文学で読者を実践へと誘っているわけではなく、ありうべき人間関係を突きつけることによって心の座標軸を動かすことを目指していたのである。

四. 「わが解体」まで

(1) 「わが解体」の情況

知識人をめぐる対談や評論を発表し、独自の知識人論を展開しつつあった時期、高橋は京大闘争に関わることとなる。それは、知的な表現活動に使命感を持っていた高橋にとって、具体的な情況への対応を迫られるものであった⁽²⁸⁾。これまで見てきたように、高橋は『悲の器』以来知識人文学を標榜し、みずからを知識人として規定してきた。しかしそれは、観念の上で語る知識人の域を出ないともいえる。高橋がいかに読者の心を揺さぶる小説世界を描いたとしても、現実に直接はたらきかけるものではない。高橋は文学と学問のあいだで葛藤してきたが、闘争の現場に立ち会うことで、そうした葛藤とは別次元の問いに直面したと思われる。

創作を通してありうべき人間関係を模索していた高橋が、現実の人間関係のなかで苦闘した出来事をみずからの視点から叙述したのが「わが解体」である。取り上げられる出来事の時間軸が前後しており、文学部教授会・学生活動家と高橋の関係も固定化したものではない。それゆえ、一読して

テキストの外延を確定することは難しい。文学部教授会の構成員に対して敬意と批判が入り混じっているだけでなく、思念上共感していた学生たちに対しても怒りを抱く場面があったと述懐している。ここでは、多層的に成り立っているテキストを再構成することにより、高橋が「わが解体」を書いた理由を浮き彫りにしてみたい。

まずは高橋が直接関係し論じているかぎりでも重要な出来事を示しておく(表1)。

高橋が京大闘争に直接関わったのは、1969年1月中旬から3月中旬までの約2か月間である。この間、1969年1月9日から3月18日まで、計22回の教授会・臨時教授会・緊急教授会が開催され、高橋は16回出席している⁽²⁹⁾。3月18日に室町教会で行われた教授会に出席した後辞職を決意、その晩に辞表を書いた。この日を最後に、高橋が教授会に出席することはなかった。以降1969年3月26日から1970年3月12日まで計25回教授会が開催されるが、高橋はすべて欠席。1969年10月27日の教授会議事録に付された授業時間割表の記載「火曜 12時50分から14時20分 中文 演習Ⅱ 1演 高橋」⁽³⁰⁾から、教育活動には従事していた可能性もある。しかし、1970年2月26日の教授会の記録には「協議事項 十三. 教官の辞職について／高橋助教授より辞職の願出であり、承認」⁽³¹⁾とあり、高橋の辞職が公的に決定したことが分かる。

「わが解体」は、1969年6月から10月にかけて雑誌「文芸」に掲載される。後に、同じく京大闘争を回想する「三度目の敗北—闘病の記—」(『人間として』第三号、筑摩書房、1970年9月20日)も発表された。外在的に見れば、大学内部の人間として京大闘争に2か月ほど関わった後に京大辞職を決意、その3か月後から文学部教授会を告発する文章を発表し始めたことになる。

一方で、辞職を決意した後も、封鎖内部で文学部共闘の学生とのあいだで行われた討論「存在変

表1 1969年1月以降の高橋の動向とそれに関する京都大学の動向

年	月	日	京都大学の動向	高橋和巳の動向
1969	1	16	学生部が寮闘争委員会により封鎖される。	
		17	学生部長名義で「学生部封鎖の事態について」が発表される。	
		18	総長・奥田東名義で「学生部封鎖の事態に関する総長の所信」が発表される。	
		19	文学部臨時教授会で「緊急事態に対する文学部教授会の見解」が出され、封鎖反対が表明される。	臨時教授会に出席する。
		23	学生部封鎖が、実質上民青系の学生・職員の手で実力解除される。	
		29	文学部学部長団交がもたれ「文学部教授会見解」に対する追求が行われた。その際、L（文学部）学友会は自己批判書に署名するよう教授会に要求した。	
		31		京大文学部第一講義室で行われた学部長および教官と学友会との団交の席上で、全共闘支持の所信表明を行う。
	2	8		文学部第一講義室で行われたティーチンに参加する。講演の原題は「大学問題をめぐって」、後に「直接行動の論理」と改題された。
		25	文学部臨時教授会の休憩後、L共闘の学生約80名が会議室に乱入、教授会が中止される。	臨時教授会を欠席する。
		26		内ゲバで負傷した学生Oの救援活動を行い、京都市内の病院と京大病院を回る。
		27	全共闘による本部封鎖が行われる。	
	3	9	臨時教授会が行われる。「議事九、文学部長所信について」により、文学部長所信を教職員、院生、学生に配付することが議題に取り上げられる。	臨時教授会で配布されたガリ刷りの「文学部長所信」草稿を実見し、その文面に「慎重に審議し」とすでに書き込まれていたことを記憶する。
		11	文学部新学部長・長尾雅人署名で「文学部長所信」が公表される。	国会図書館資料調査のため東京へ、晩に鎌倉の自宅に帰る。
		12	所信の内容をめぐって文学部共闘会議による新部長の追及団交が行われ、団交の席で新部長の辞意が表明される。	
		13	文学部教授会で文学部長辞意が不承認となり、団交再開破棄が通告される。この対応に憤ったL共闘により、同日深夜に文学部が全館封鎖される。	教授会を欠席する。封鎖完了の時点で、院生と助手から電話があり、事態の経過を知らされる。
		14		予定より1日早く、国会図書館資料調査の出張から京都に戻る。
		17	文学部教授会弘報係名義で「弘報 現在の事態について」が発表される。	
		18		室町教会で開催された教授会に出席する。終了後、辞表を書く。
		18	東洋史闘争委員会により壁新聞「清官教授を駁す」が作成される。	「清官教授を駁す」が高橋研究室の窓の下に張り出されるが、高橋は気がつかないまま数日過ごす。
		不明		高橋を糾弾する「清官教授を駁す」について、中国文学の学生から知られる。
	4	8		8日から13日まで、封鎖の内部で行われた討論に参加する。断続的に録音した8時間のテープの抄録を、後に「存在変革への執拗な問い—京大L（文学部）共闘の模索」として発表する。
	6	1		「わが解体」を雑誌「文芸」（河出書房新社）に発表する。
		14		京大新聞社主催『京大闘争—京大神話の崩壊』出版記念講演会で講演「自己否定の論理」を行う（於京大薬友会館）。
	7	1		「わが解体」（二）を「文芸」に発表する。
	8	1		「わが解体」（三）を「文芸」に発表する。
	8	17	大学の運営に関する臨時措置法が施行される。	
	8	30		島根大学で講演「全共闘運動と文学精神」を行う。
	9	21		北海道大学クラーク会館で講演「大学・戦後民主主義・文学」を行う。
	10	1		「わが解体」（四）を「文芸」に発表する（未完）。
1970	2	26		文学部教授会で高橋の辞職願が承認される。
	9	20		「三度目の敗北—闘病の記一」を雑誌「人間として」第3号（筑摩書房）に発表する。
1971	3	5		単行本『わが解体』が河出書房新社から刊行される。
1971	5	3		永眠。

革への執拗な問い—京大L（文学部）共闘の模索—」（1969年4月8～13日）に参加したことに始まり、全共闘反大学主催の大討論会（同6月25日）に参加することが予定されており⁽³²⁾、依然として京大闘争に関わっていたと推測される。さらに1969年4月から71年初めにかけて、学生運動をめぐる多くの対談や講演に臨んでいる⁽³³⁾。「わが解体」が京大闘争における実体験をもとにしているのに対して、これらの対談・講演は、学生運動をより一般的な理論として捉えるという側面が強い。ここでは、京大闘争における2か月間の高橋の動向を辿り、教授会と決別するに至った経緯をみていきたい。

（2）不運なすれ違い

1969年1月16日の学生部建物封鎖後、大学内で争点となったのは、「封鎖」に対する対応であった。1月17日に学生部長名義で「学生部封鎖の事態について」、1月18日に京都大学総長奥田東名義で「学生部封鎖の事態に関する総長の所信」が発表され、いずれも「封鎖解除」を要求した。京大文学部は1月19日に「緊急事態に対する文学部教授会の見解」を発表し、封鎖が研究教育の機能を停止させる恐れがあるとして封鎖行為に対して強く反対することを表明。一方で「見解」はまた、大学の管理運営などの大学体制そのものに内在する諸問題について改革する意思があることを述べるものでもあった⁽³⁴⁾。

この「見解」に対して憤ったのが、学生自治会のL（文学部）学友会とL共闘である。1月31日の文学部教授会団交への参加を促すビラに、L学友会が29日の学部長団交で署名を要求した自己批判書の内容が記されている。「自己批判—文学部教授会は、文学部封鎖という流言によって、強度の不安から封鎖の実現を確信するに至り、教授会見解なる文書を作成し、虚偽の現実をつくった。その無責任を自己批判する。」⁽³⁵⁾ 教授会団交でも、

この自己批判に応じることが要求された。封鎖をめぐる学内の学生団体でも賛否が分かれており⁽³⁶⁾、封鎖の是非のみが教授会と学生の意見の相違になったわけではないと思われる。L学友会及びL共闘が自己批判を要求したのは、学生部封鎖が文学部封鎖へと結びつくという風評を警戒して封鎖反対の意思を表明したことに対してである。

高橋にとって、1月31日正午から文学部第一講義室で行われた団交は、最初の転機となった。団交の席上で高橋が行った所信表明は、2月15日執筆の「孤立の憂愁を甘受す」⁽³⁷⁾で再現されている。そこで高橋は、23日に行われた民青系の学生・職員による学生部封鎖の実力解除については善意を疑わないが、大学の自治や学問の自由が教授会の自治にすぎないことは認めざるをえない旨を述べた。さらに、教授会には民主制の原則である「公開性」と「相互批判性」すらないと批判したのである。また、封鎖の論理的必然性を学生自身が展開できていないと捉え、封鎖という手段について疑問視している。

その後、高橋は2月8日にティーチインの講師を務めている⁽³⁸⁾。ティーチインでは、資本主義体制を支える三本の柱として、資本家等の経済体制、国家権力、そして位階制を理念的に権威づける宗教家・大学人の三つを挙げ、大学紛争には三番目の柱を変革できるかがかけられているという考えを示した。さらに「公開性」と「相互批判性」についても、大学内の講座制が学問に必須の「相互批判性」を妨げてきた結果、無責任性が露呈したと述べた。高橋の批判は、自身を含む文学部教員にまで及ぶ。「孤証は証ならず」という複数の資料にもとづく傍証の積み重ねを重んじていた教員が、文学部封鎖という一つのデマに流されたことを見て、何十年間にも及ぶ学問的精神が学生運動の理念や精神に対峙できていないと高橋は捉えた。さらに「相互批判」を示す例として、安保闘争時の竹内好と丸山真男の対応を挙げる。吉本隆明の

批判に応え大学を辞した竹内好と、批判に答えなかった丸山真男を比べ、丸山が批判に答えずに許されたのは「大学が世間と隔絶された一つの特権的世界である」ためだと高橋は見なす⁽³⁹⁾。

高橋の大学への不信が高まったのが、2月26日の内ゲバで負傷した学生への大学病院の対応である。そのエピソードを、高橋は「わが解体」で詳述する⁽⁴⁰⁾。学生Oははじめ京都市内の二つの病院で診察を受けるが、設備がないということで京大病院に運ばれる。しかし、入院、手術が必要だという状態にもかかわらず、大学病院では外傷の縫合だけで済まされるのみであった。高橋はその理由を追及するが、大学病院からは相手にされない。Oの立場が大学側にとって都合が悪いため、大学病院全体にある命令が出ているためであった。負傷から五日目、ようやくOは手術を受ける。この一件を通じて高橋は、Oと彼の救援に尽力した人々とのあいだに、学生と教師を超えた精神的紐帯があると感じたのであった⁽⁴¹⁾。一方でこの件は、「排除の思想」を纏った権威として大学を糾弾することに高橋を向かわせることにもなった。

高橋をさらに心理的に追い詰めることになったのが、東洋史闘争委員会が3月18日付けで作成した壁新聞「清官教授を駁す」⁽⁴²⁾である。高橋研究室の窓の下に貼られた壁新聞は、名指しこそしていないものの、高橋が団交で発した言葉をそのまま引いて高橋を糾弾するものであった。研究会をともにしたメンバーから糾弾されたことも、高橋にとって痛切なものであったと推測される。批判した大学の走狗に過ぎなかったのではないかという自責の念に駆られ、高橋はすり減った神経を酒で紛らわせるしかなかった。

告発文は、闘争する学生に対しては進歩的ポーズを取って「清」をふりまきながら、それに反して「官」にしがみつくとして高橋を糾弾するものであった。壁新聞が批判したのは、3月11日の長尾雅人「文学部長所信」が、1月19日の「緊急事

態に対する文学部教授会の見解」を自己批判せず居直ったものであるという点だった。そして、高橋がそれを容認したと告発者たちはみなし糾弾したのである。

しかし実際には、高橋は容認したのではなく、3月11日に京都にいなかった。3月11日から14日にかけて、「文学部長所信」をめぐって教授会とL闘争とのあいだで意見の衝突があった。12日に所信の内容をめぐってL共闘による長尾新学部長の追求団交が行われ、その席で長尾の辞意が表明された。しかし13日の臨時教授会は、L共闘の要求に応じず、学部長辞意の不承認が下記の通り決定された。

議事

一、文学部長所信の撤回及び学部長の辞任について

昨日午後五時より今朝六時半までL共闘が長尾学部長、辻村、谷、藤沢各教授と団交強要、所信は不当であり、学部長に辞任することを要求したので、今十三日教授会に計ることを約束した。意見交換の結果、教授会は学部長所信の正しいことを異議なく再確認し、従つてその撤回に反対する、その当然の帰結として、学部長が所信発表の責任ゆえに辞任することを承認できない。本日のL共闘との団交には応じないことが適当であると認められ、学部長はそれに従うこととなった。⁽⁴³⁾

つまりL共闘は長尾新学部長に辞任を要求し、長尾も一度はそれを受け入れたが、教授会はそれを認めずL共闘との団交にも応じないこととしたのである。この教授会の対応に憤ったL共闘は、文学部全館封鎖を行った。

それまで礼節を保った議論が交わされていた団交が決裂し、13日の文学部全館封鎖という事態に至るまでの4日間、高橋は交渉の場に不在であった。

国会図書館資料調査の出張許可を得て東京に赴いていたからである。これには、不運としか言いようがない事情が絡んでいる。1月半ばにはじまった闘争以来2ヶ月間、高橋は鎌倉の自宅に帰ることがなく、京都の仮寓と大学を往復する生活を続けていた。高橋は、入試採点業務のノルマを前倒しでこなして時間をつくり、国会図書館資料調査の出張の折に自宅に立ち寄るという方法をとった。その後、文学部の団交再開が予定される3月15日には京都に戻るという段取りにしていたのである。不在にする4日間のあいだに教授会と学生の関係が激変することは、予想しえなかった⁽⁴⁴⁾。

3月18日の「清官教授を駁す」が糾弾したのは、3月11日の「文学部長所信」とそれに反対しなかった高橋であった。高橋は「文学部長所信」を長く引用し、その内容と発表の経緯を詳らかにする。そこには、「文学部長所信」に対して反対できなかった高橋の後悔が滲み出ているように思われる。「文学部長所信」では、1月19日の「文学部教授会見解」に対し「三月九日の教授会は、右の事実に基づいて慎重に審議し、左の通り『教授会としての反省』を行った。」と記されている。高橋は、その文言には明白な虚偽があるとする。高橋の記憶によれば、三月九日の教授会では「文学部長所信」の草稿が配布され、二、三の人が意見を述べるだけの形式的な審議が行われた後、草稿もすぐに回収された。そしてその文面には、「慎重に審議し」とすでに書き込まれていたという。このことに疑義を呈した教授は、団交に参加していないことを理由に発言権を与えられなかった。つまり、3月11日に配布される「文学部長所信」⁽⁴⁵⁾は、3月9日の教授会で審議される前の段階で「慎重に審議」されたことが予定されていたのである。

さらに高橋は、草稿と発表された所信には「改悪的改竄」があると指摘する。2月25日から3月1日までに延べ60数時間の団交が行われ、教官は一人ずつ自己批判を要求された。この団交が不当

なものであることを高姿勢で批判するくだりは、草稿にはなかったと高橋は記憶しているという。

高橋が3月11日の発表時に「所信」を実見していれば、上記の不可解な議決と「改悪的改竄」に気づくことができたかは定かではない。所信をめぐる教授会の議決に高橋がこだわるのは、3月18日の「清官教授を駁す」で自身が糾弾されたことも一因となっていると思われる。ともあれ、高橋が「わが解体」で教授会のあり方を告発した背景には、このような不運なすれ違いがあったのである。

(3) 公開性と自己否定

高橋はもともと、教授会よりも研究と研究を通じた院生・学生との交流に大学の教授者としての存在意義があると考えていた。教師と学生の間で熟練性の違いがあるとしても、共有している関心をもとに人間的な交流をもつことが教育であると高橋はいう。この見方は、知識人が身分によって規定される存在ではなく、自立的な思弁による存在であるという高橋の知識人論に通ずるところがある。「わが解体」の冒頭で高橋が桑原武夫の「人間の戦い」(1950)を引いたのは、教授会での議決の仕方を告発するためであった。桑原の文章は、ある教員が出身を理由に教授昇進を阻まれたというセンセーショナルな例を引き、新憲法下にあっても教授会に根強く残る封建性を批判したものである。「人間の戦い」の引用から始まるのが、「わが解体」が書かれた目的を示していよう。

高橋が教授会の「公開」を主張したのは、「公開性」と「相互批判性」が民主制の原則であると捉えているからである。高橋は闘争中に、教授会が公開的な団交を持ち続けるべきと主張した。政治における秘密が、指導者と大衆を永遠に区分しつつつける「悪魔的徽章」であるという考えも背景にあった。政治の必要悪である「秘密性」を理論的に克服するものとして高橋が掲げたのが、「自己否定」「自己告発」の精神である。高橋は言う。

そして、やむを得ず身にまとう神秘性に対する、未来に向けての贖罪としての自己否定とはなにか。それは常に自らの姿を全的に開示しようとする理論の形成であり、いま一つは敵に向ける刃を自らにも向けてみるほとんど文学的な自己告発の精神である。⁽⁴⁶⁾

「自己否定」とは大学闘争で盛んに叫ばれた言葉だが、高橋はそのままの意味で使っているわけでない。

「わが解体」で用いている「自己否定」とは、教授会の秘密性を構成員として告発すると同時に内的な葛藤を鋭く告発するという文学的な主題とも関わるものであった。高橋が「自己否定」を重く受け止めたことには、闘争で使われた「自己批判」に対して不満を抱いたということが背景にあるように思われる。団交の席で自身の自己批判書が全共闘によってすでに用意されていたことや、教授会が一度自己批判したにもかかわらず3月13日の団交拒否でそのすべてを破棄したことについて、高橋は「自己批判」を軽々しく捉えていると批判した。高橋にとっての「自己否定」とは、最後のよりどころとなる文学が高橋自身を告発するという、身を賭すようなものだったのである。

一方、「わが解体」執筆と同時期に行われた講演「自己否定の論理」で高橋は、京大闘争で「自己否定」という言葉を実感したものの明確にどのような思念を意味するのかは分かっていないと語り、「自己否定」の歴史を辿り直している。

芸術や文学で使われるものとして、高橋はショーペンハウエルの使う「自己否定」を挙げる。これはプラトンやカントの流れを汲む考えで、現実の世界より価値の高い、透明なアイデアの世界に到達するには、現実の呪縛の中にある自分自身を否定するというものである。さらに、人間の存在自体を罪あるものと見なす宗教的な「自己否定」がある。

政治における「自己否定」は、ロシア革命前夜

のインテリゲンチアに起源がある。貴族の子弟は農奴から得た富の上に立って知識を身につけることができたという罪責感を抱いており、それを啓蒙運動の中で浄化しようとした。これはさらにマルクス主義の知識人論へと結びついた。知識人は一種の浮遊階層であり、真の革命主体である労働者の同伴者、後衛になるべきであるとされる。その際、「自己否定性」は自己の内面にとどまり、攻撃性をもたない。

このように、様々な分野の「自己否定」を辿りつつ、学園闘争で掲げられた「自己否定」を高橋は理論的に捉え直した。それは、自らに向けるだけでなく敵対者に対する剣に転化する攻撃性をもつものであった。

おわりに

以上、『悲の器』（1962）の執筆と知識人文学の理論研究が両輪となっていた時期から「わが解体」へと至るまでの高橋の知識人論を辿った。高橋が実作で知識人を対象としたのは、近代日本における知識人の苦悩を捉えるという文学理論研究と相即不離のものであった。文学と学問という区分に早くから自覚的であった高橋は、いずれの表現活動もその時代の人間の苦悩を描くことが目的であると捉えた。

60年代には、サルトル来日による知識人論の隆盛を受けて、高橋も知識人に対する考えを表明しはじめた。1968年に行われた吉本隆明との対談では、高橋の知識人論がより鮮明になる。安保闘争で前衛の批判者としてあらわれた吉本は、知識人が絶えず「大衆の原像」を自己に繰り込むべきであると考えた。一方、高橋にとって知識人として上昇していくことは、生まれ育った故郷から離れていかざるをえないという罪責感をともなうものであった。この時期の知識人論からは、社会の矛盾を体現し自問自答を繰り返す思弁的な存在が知識人であるという考えに至ったことが分かる。

学問への専心を決めた後、京大闘争へと積極的に関わったのは、知識人としての使命感にもとづくものであった。闘争の始まった頃から高橋が主張し続けた「公開性」には、「万人が知識人にならなければならない」という元来抱いていた考えが背景にあると思われる。「公開性」という自身の信条が受け入れられなかったことに加えて、負傷した学生への大学の対応や教授会での議決方法に不信感をつのらせた結果、高橋は心理的に追い詰められていった。さらに、教授会とL共闘の関係が悪化した3月11日に不在にしていたという不如意の事態が、高橋の挫折を決定づけた。教授会議事録に即しても高橋の事実認識に誤りはない。「わが解体」で教授会の議決方法に過剰にこだわっているのは、高橋の挫折感が強く投影されたものと捉えられる。

思想は行動化されなければならないと考え闘争に関わった高橋は、二か月で挫折することになった。そして、「解体」へと向かう過程で、現実そのものの変革ではなく、自己の内面を鋭く告発する文学にこそ、社会の矛盾を解決する可能性を見出したのである。

[付記] 本論文はJSPS科研費若手研究「JP19k12973」の成果である。

[註]

- (1) 全国の大学紛争における京大闘争の位置づけを明確にし、寮闘争委員会による学生部建物封鎖闘争が本格化した1969年1月16日以降の過程を辿った研究として、西山伸「京都大学における大学紛争」『京都大学大学文書館研究紀要』第10号、2012年。京大闘争に関する文献としては、同論文で挙げられる京大新聞社編・京大全共闘協力『京大闘争 京大神話の崩壊』（三一書房、1969年）、京大問題記録編集会編『レポート 揺れる京大一紛争の序章—』（現代数学社、1969年）、京大闘争記録刊行会編『京大闘争の記録 スクラムの海から』（京大

闘争記録刊行会、1969年）を参照。

- (2) 1967年12月現在の共同研究参加者は、桑原武夫、上山春平、多田道太郎、樋口謹一、藤岡喜愛、加藤秀俊、飛鳥井雅道、竹内成明、作田啓一、山田稔、高橋和巳、橋本峰雄、梅原猛、西川長夫、鶴見俊輔、牧康夫、杉本秀太郎、荒井健、松田道雄。
- (3) 安保闘争と高橋の関連については、拙稿「高橋和巳における超越的価値への志向—戦後民主主義のたどなかで—」（出原政雄・望月詩史編『戦後民主主義』の歴史的研究』2021年、法律文化社、所収）参照。
- (4) 章立ては以下。「一、近代化過程の知識人」、「二、高等遊民の悲劇」、「三、「代助」の内面と社会」、「四、男女の中の政治」、「五、悲劇の風化」
- (5) 1947年に発表され、何度かの中断を経た後に、1970年8月23日に第六部が脱稿された。野間宏『青年の環5 炎の場所』（河出書房新社、1971年）、675頁。
- (6) 高橋和巳「知識人の苦悩—漱石の『それから』について—」（桑原武夫編『文学理論の研究』1967年、岩波書店、140-155頁所収）、155頁。
- (7) 『高橋和巳全集 第二巻』1977年、河出書房新社、132頁。
- (8) 同僚であった奈良本辰也は、『悲の器』が世間に広まったことによって高橋が大学を辞するのではないかという話が出てくるようになったと述懐している。奈良本辰也「高橋和巳君と私」『高橋和巳全集 第二巻』月報、2頁。
- (9) 高橋和巳「知識人の苦悩—漱石の『それから』について—」（桑原武夫編『文学理論の研究』1967年、岩波書店、140-155頁所収）、155頁。
- (10) 『高橋和巳全集 第二巻』1977年、河出書房新社、146-147頁。
- (11) 高橋和巳「文学の責任」（『高橋和巳全集 第十四巻』1978年、河出書房新社、5-50頁所収、初出「対話」第2号1957年3月1日）、32頁。
- (12) 同上。
- (13) 高橋和巳・吉本隆明「現代の文学と思想」（『高橋和巳全集 第十八巻』1978年、河出書房新社、493-520頁所収、初出『群像』1968年5月号）、

- 494頁。
- (14) 同上。
- (15) 前掲書、496頁。
- (16) 高橋和巳「文学のくるしみとよろこび」（『高橋和巳全集 第二十巻』1980年、河出書房新社、95-102頁所収、1965年3月6日の講演会）、101頁。
- (17) 高橋和巳「現代日本知識人の課題」〔草稿・転写〕（『大東文化大学紀要〈人文科学編〉』第57号、2019年、318-307頁所収）、311-312頁。田中寛による解説をも参照。
- (18) なお、1966年以降に日本で知識人が盛んに論じられたのは、サルトルの滞日講演が影響している。サルトルは1966年9月18日に来日し、9月20日に慶應義塾大学で「知識人の位置」、9月22日に日比谷公会堂で「知識人の役割」、9月27日に京都会館で「作家は知識人か」の講演を行った。「知識人の役割」では、マルクス主義と知識人の問題、およびベトナム戦争について語っている。ジャン・ポール・サルトル著、佐藤朔・岩崎力・松浪信三郎・平岡篤頼・古屋健三訳『知識人の擁護』（人文書院、1967年）参照。
- サルトル講演後に行われた討論集会「ベトナム戦争と反戦の原理」（『世界』1966年12月号）には、サルトル、ボーヴォワール、小田実、開高健、久野収、竹内好、谷川雁、小松左京、いいだもも、鶴見良行他が出席した。高橋が臨んだ、江藤淳・永井陽之助・いいだももとの対談「現代知識人の役割」（1968年3月）は、こうした流れを受けたものと思われる。
- (19) 高橋和巳「墮落の二重性」（『高橋和巳全集 第二十巻』1980年、河出書房新社、103-112頁所収、1966年11月23日に小野梓記念講堂で行われた早稲田短歌会主催早稲田祭参加講演会）、110頁。
- (20) 高橋和巳「現代文学の課題」（『高橋和巳全集 第二十巻』1980年、河出書房新社、113-129頁所収、1967年3月18日に東京紀伊国屋ホールで行われた第8回新潮社文化講演会）、116頁。
- (21) 吉本隆明『擬制の終焉』現代思潮社、1962年、87頁。
- (22) 吉本隆明『自立の思想的拠点』徳間書店、1966年、102頁。
- (23) 前掲書、106頁。
- (24) 高橋和巳・吉本隆明「現代の文学と思想」（『高橋和巳全集 第十八巻』1978年、河出書房新社）、511頁。
- (25) 同上。
- (26) 高橋は釜ヶ崎を舞台とする小説「貧者の舞い」を「文学界新人賞」に投稿するが落選した。同賞に当選した石原慎太郎「太陽の季節」は、資本主義社会のしわ寄せを受けている釜ヶ崎を描いた高橋の作品とは対照的なものであった。村井英雄『書誌的・高橋和巳』（阿部出版、1991年）、127頁。
- (27) 沖浦和光・柴田翔「現代学生運動の起点」（『高橋和巳全集 第十八巻』1978年、河出書房新社、249-256頁所収、初出『現代の理論』1966年5月号）、253頁。
- (28) 京大闘争への高橋のコミットを予感させる発言もある。「つまり自分の肉体的条件さえ許せば、いろんなところに首をつっこみたい欲望があるんや。〈中略〉一生の可能の幅をできるだけひろげたいという猛烈な欲求があってね。」天野政次・上原喜八・北川莊平・北山信夫・竹内和夫・福田紀一・山田稔・鳥巢郁美「文学と職業」（『高橋和巳全集 第十八巻』1978年、河出書房新社、66-84頁所収、初出『VIKING』1963年11月号）、71頁。
- (29) 『昭和四十四年一月～三月 教授会議事録 文学部』京都大学大学文書館所蔵、識別番号：03B00113。
- (30) 『昭和四十四年四月～十二月 教授会議事録 文学部』京都大学大学文書館所蔵、識別番号：03B00114。
- (31) 同上。
- (32) 「大討論集会」京都大学大学文書館所蔵、資料番号：大学紛争Ⅰ-4-849。参加者として高橋和巳・折原浩・井上清・滝田修。
- (33) たとえば以下のものがある。河野健二・作田啓一・森毅との討論「学生について」（1969年5月5日）、講演「大学闘争の中における文学—生涯にわたる阿修羅として」（東京大学全学助手共闘会議および日本大学教員共闘委員会共催「全国教官討論集会」

での講演、1969年5月29日、東京、文京公会堂）、講演「自己否定の論理」（京大新聞社主催『京大闘争—京大神話の崩壊』出版記念講演会、1969年6月14日、京大楽友会館）、講演「全共闘運動と文学精神」（1969年8月30日、島根大学）、講演会「大学・戦後民主主義・文学」（北海道大学出版会主催、1969年9月21日、北海道大学クラーク会館）、三島由紀夫との対談「大いなる過渡期の論理」（『潮』1969年11月号）、講演「文学の根本に忘れ去られたもの」（高橋和巳講演実行委員会主催、1970年10月18日、宮城県角田市角田小学校）、小田実・開高健・柴田翔・真継伸彦との対談「混沌の中の創造—学生運動の思想的体験」（『人間として』第二号、1970年6月20日）、日高六郎との対談「解体と想像」（『群像』1970年10月号）、高知總との対談「『新左翼』の退廃と知識人」（『早稲田大学新聞』1970年11月5日号）小田実・開高健・柴田翔・廣松渉・真継伸彦との対談「新左翼の思想と行動」（『人間として』第四号、1970年12月25日）。

そのほか、病氣療養中に参加した長時間の討論の記録として、共産主義者同盟赤軍派『世界革命戦争への飛翔』（三一書房、1971年3月31日）。討論記録の第一部「討論・世界革命の現実性をどこに求めるか」の章立ては、「Ⅰハイジャック闘争—その背後の思想」「Ⅱスターリン主義と変革の基点」「Ⅲ世界革命戦争の原イメージ」「Ⅳ〈戦争〉と〈革命〉はどう結びつくか」「Ⅴ蜂起に至る具体的な諸問題」「Ⅵ国際的な革命運動から何をひき出すか」「Ⅶ女性解放闘争と革命運動」「Ⅷ全共闘運動の実態と党的飛躍」「Ⅸ内ゲバの論理をどう超えるか」。

(34) 『昭和四十四年一月～三月 教授会議事録 文学部』京都大学大学文書館所蔵、識別番号：03B00113。

(35) 「1・31大衆団交に結集せよ！」京都大学大学文書館所蔵、識別番号：京大闘争-1-110。

(36) 「封鎖解除」を主張するグループとして、五者連絡会議、経済学部大橋ゼミナール、C自（教養部自治委員会）、封鎖解除大学民主化実行委員会、京大職組教宣部、京都府学生自治会連合、教養部支部委員会、京大民青同盟（日本民主青年同盟）、同

学会、等。「封鎖支持」を主張するグループとして、文学部助手・大学院生共闘会議、C斗委、全学連主流派、反帝学評、マル学同中核派京大支部、統一会議、全学助手院生共闘、毛沢東思想学生同盟、ワンダーフォーゲル部有志、理学部助手・院生共闘会議、「非国民」の会、等。1969年1月中に配布されたビラを参照。京都大学大学文書館所蔵、識別番号：京大闘争関係資料—1-1～1-118、2-1～2-54。

(37) 高橋和巳「孤立の憂愁を甘受す」（『高橋和巳全集第十一巻』1978年、河出書房新社、103-112頁所収、初出『朝日ジャーナル』1969年3月9日号）、109-110頁。

(38) 自主講座には、2月4日に井上清・清水多吉が、2月5日に折原浩・廣松渉が、2月7日には村尾行一が講師として参加している。『京大闘争—京大神話の崩壊』（三一書房、1969年）年表参照。同年表では2月7日に高橋も自主講座に参加したと記されているが、配布されたビラと発表された「京都大学新聞」1969年2月24日号の記述から、2月8日に行われたティーチインの誤記と推測される。L（教養）斗争委「文学部学友へ！—文学部斗争に関するティーチイン—」京都大学大学文書館所蔵、識別番号：京大闘争-2-88。出席者として高橋和巳助教授、L助手・院生・学生等。

(39) 高橋和巳「直接行動の論理」（『高橋和巳全集 第二十巻』（1980年、河出書房新社、171-187頁所収）、174頁。

(40) 高橋和巳「わが解体」（『高橋和巳全集 第十一巻』（1978年、河出書房新社、5-81頁所収、初出『文芸』1969年6、7、8、10月号）、14-23頁。

(41) 2月27日付けの文書で、1月16日以降の紛争が「大学とは何か」という根源的な問いを含んでいるところに意義を認め、犠牲者の方々の治療に対して援助することが呼びかけられた。京大紛争による犠牲者救援委員会「お願い」京都大学大学文書館所蔵、識別番号：大学紛争Ⅱ-4-48。委員会の発起人として、人文科学研究所助教授飯沼二郎、教養部教授河合良一郎、文学部助教授高橋和巳、経済学部教授出口勇蔵、農学部教授半田良一。

- (42) 高橋前掲書、41-42頁に高橋による引用。京大問題記録編纂会編『レポート 揺れる京大一紛争の序章―』（現代数学者、1969年）、279-280頁。
- (43) 『昭和四十四年一月～三月 教授会議事録 文学部』京都大学大学文書館所蔵、識別番号：03B00113。
- (44) 高橋和己「わが解体」『高橋和己全集 第十一巻』（1978年、河出書房新社）、30-38頁。
- (45) 3月9日の臨時教授会の議事記録には、「九、文学部長所信について／別紙文学部長所信を教職員、院生、学生に配布する。」と記載されている。『昭和四十四年一月～三月 教授会議事録 文学部』京都大学大学文書館所蔵、識別番号：03B00113。
- (46) 高橋和己「わが解体」『高橋和己全集 第十一巻』（1978年、河出書房新社）、45頁。